

## 50周年記念 花器等の公開に寄せて

東京芸術大学大学美術館長・教授 黒川廣子

このたび特別公開される陶磁器、七宝、金工の花器 26 件は、昭和 48 年 (1973) 年まで、宮殿の調度品として宮内庁の管理下にあったものが、迎賓館赤坂離宮が開館することを機にその装飾品として移管されたものである。宮殿の調度品は、定評のある制作者に宮内省が依頼して購入されるもの (御下命) や博覧会や展覧会で受賞した作品が買い上げられるものなど、さまざまな経緯で集められた。宮殿を飾るだけでなく、作品が宮内庁 (戦前は宮内省) 御買い上げとなることが制作者にとって荣誉とされ、皇室による美術工芸家の奨励の意味も大きい。

今回展示される花器類は、19 世紀後半から 20 世紀はじめ頃の作品で、日本の工芸界が西洋の影響を受けて、技術革新やデザインの改良に邁進した時期の成果である。陶磁器では精緻な絵付けや釉薬及び焼成の技術改良、七宝焼は釉薬の色彩や銀線や下地などの表現の工夫、金工は金属特有の発色や鑿による彫金技法にそれぞれの作家の切磋琢磨する姿勢が窺われる。とりわけ 1900 年のパリ万国博覧会には、日本の美術の精華を諸外国に見せるために、宮内省より帝室技芸員や高い評価を受けた同時代の作家たちに対して御下命があった。これを受けた作品は、その使命を負った当事者たちの最高の表現であったと言っても過言ではない。

紹美栄祐 (1839 年～1900 年) は、金属をたたいて器の形を作る鋸起 (鍛金的一种) と呼ばれる技法や、銅合金の表面に酸化皮膜を形成させて独特な発色を呈する秘伝で名高い。《金銀象嵌宇治嵐山の景》 一対 (図 1) は、紹美が 1900 年のパリ万博の御下命制作に加わるために、自らアピールして制作が認められ、同時に出品した他の作品と合わせて金牌を受賞した作品である。口及び台は赤味のある緋銅 (赤い酸化膜をつけた純銅)、肩は四分一 (銀が約四分の一含まれる銅合金)、中央の風景の大半は黄銅 (銅と亜鉛の合

金)に金、銀、赤銅(銅と金の合金)を象嵌し、水辺を四分一としている。右側は春暁の嵐山の景色、左側は秋夕の宇治の景色で、筆で絵を描いたように見える象嵌の技法を工夫して遠近感を表現している。

三代清風與平(1851年-1914年)は京都の郊外の山林で焼物の素地あるいは釉薬の原料となる土を探し歩き、さまざまな新しい技術を創出した。その代表的なものの一つが、天目釉で模様となる斑を表現するものである。《天目釉雲龍斑》(図2)がその技を示すものとして宮内省の御下命を受けて制作したほかの2点の作品とともに1900年パリ万国博覧会で銀牌を受賞したものである。天目釉とは鉄を多く含んだ黒い釉薬で、鉄分の量により、飴色、褐色、黒色などのさまざまな色調を呈する。日本では、天目の茶碗や茶入れなどの茶道具が古くから珍重されたが、この花瓶は、褐色の中に黒い雲と2頭の龍の斑(まだら)模様を表現した珍しいデザインの作品である。

清風與平の雲龍とは対照的に、石野龍山(1861年-1936年)《九谷焼波に龍模様》一対(図3)の龍は、鱗の一つ一つの中央に暈<sup>ぼか</sup>しを施し、体を大きくねじる五爪龍として鮮明な輪郭線で描かれている。五爪龍は、皇帝の象徴として権威と威厳を表し、幸福と繁栄をもたらす文様である。背景一面に大振りの青海波文で埋め尽くすが、青海波もまた、穏やかな波が広がり、未来永劫の平穏を意味する吉祥文である。石野龍山は九谷焼の緻密な陶画と独創的な赤絵金彩で知られ、また、各種の釉薬を精力的に発明し、釉下彩の研究に尽力した。

川出柴太郎(1856年-1921年)は、明治時代後期の七宝焼を代表する作家で、安藤七宝店の工場長としても活躍した。さまざまな技術革新に尽力し、とりわけ盛上七宝という釉薬を重ねたレリーフ状の表現や、流れ釉を開発したことで名高い。《青色地麒麟鳳凰模様》(図4)には、この時代に流行した銀箔を貼った胎の雲文と細やかな凹凸の下地が、透明度の高い鮮やかな青い釉薬を通して光が当たるとキラキラと輝く。これを背景に、見事な銀線と釉薬で吉祥の前兆として現れる鳳凰と麒麟モチーフ、首回りに菊唐草文、高台には藤唐草文を表す。

図1 金銀象嵌宇治嵐山の景



図2 天目釉雲龍斑



図3 九谷焼波に龍模様



図4 青色地麒麟鳳凰模様

